風月
人情　春筆具　二篇　下

特別
へ13
4203
3

森本久

風月花情 春告鳥巻之三

江戸 金龍山狂訓亭

第五章

爲永春水著

昭和弐八年四月三日
神保五郎氏寄贈
58 2843

久助一人で御墓所迄参りしが小松がまゐるでござりますからト
宿を出るを押へて 香「コレサア寝て居やヨ あすのでもいくから
そして久助ハ先刻から神奈川まで使に出て居るから明日でなければ
帰らねへ 久「イヤ左様でござりましたか少しもぞんじませんが暗
うちにござりましたか 香「左様ヨ暁方に起して築地へ
久「左様でござりましたかそれでハ今日ハ実母が使ひへお出
遅くまで小松一人にて居ました子 香「さうしろよ 久「御しまいて
まあござりませ 香「小松一人参りて奥のまあへ
久助を待人使に出したハおれが気のつかねへト 久「それハそうでござりませう
親ますしてお粒ハ指を上まして それ／＼ 香「お腹が冷えて
それともそんなことハ御の事だト 久「ハイそれからマア
お座敷やおなかをかたづけますト いひ捨て奥をさして行
アノコレまあの家に間がまるけれバなかなかうかしく 「アアおそ
おとの火をたくしつら人ますぞト 窓を閉め寝床に入
理にありかせらし郷の段縮緬の
形にて枕元へ出しろ 戦慄するおぼえ

けれバ「さゆく若衆を若ね人が密くかせして今日をを
するうちハ夜の御まへが寝まきをその上に着るがりくれを流と
風をひかせサアこふめらアト鼠衍の襟をあてしをとりくやる
「ハイト言つく次へ立出寝まきて縮緬を流ぐよき身の性
田舎の座敷を出して若き人ぞこの衣裳は鳥雛の母が清らかく出武
みごとくミへくまへしまり上京ハ巾綱戸中形の小袖お茶え蒼蘭の
縮梅の中ぐるミ縞めんを出して付し縫くの綱わき染沖形の裏へ
格メちりめんの付する半襟をかけし 縞縁袖口ハ浅葱の小まへ

ちりめんありて帯ハ黒繻子へ緋鹿子の割まへ[illegible]
風ハひかしまいとしらん 脇杖着せる嫗女子[illegible]
てお寝巻ゆくも帰かへだ 「オヤ姫しの久助どんが何の角出て
うちお役目ニ往こそござト [illegible]
かく世けん八色の刻どろのけしまと見へてさや濃家ニハ[illegible]
理をきらへ娘の[illegible]
「昔ハ名ぶ[illegible]汲風として[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]ものだまかまの[illegible]

なま中そよぐ玉ござの「独りかへ「あまりけなりきとし
うきよのくやうさげする笹の葉の一夜のちぎりかはり
来ぬとおもふがなれ月のつかの面影のうけとるでまま
もとどうぞくるちそそし其縁者のきざまるぞとれぞち
あるのめのぐるみ
「ヤヤくつるぞさらいなり浮るるをさらへのへあまへとう
六玉川の内の千鳥の玉川とうりのの江戸でも都ても
するのを吟るのよどよして語るうきらん

「ぐ哀世のは逢ひまへは
「どよしてまよりぞ花為うられ初恋見染のおもかげの
縁らうぞ八どん白がアま繋しうらみへのあるく中の
の身ぶんぞうぜん為身でもそもおとづるひとをぞうつ
浮ふ跡に縁る川のお流さんと中うもめるしまくの
ぞもの血をうをめげく啓る血色のおやうんのとも
ゆろるの私ぞやア花もしろくるのかう今に歩み
ろやう恋らんトところよめまる独云いつの身かへ八

お民
鳥雅

アヽ引ひよんな端から出て來て手づよく御意見なさるのだトいつか晴
お前八次の間へ来て我が嘘を與次郎八殿を見せておくり「且那
新地の町をお見なさりもせずつて八どうせ只ずんが新孝にはめらうけ
たまりつてる角のまへをよく氣をつけてちよく〳〵どうせ只ほんとうの事ほど
キシおあへさんもうるせへねへチツト浦ひでもおよそるせへまし左
爰の道楽でも出るといけませんぜ　香「アヽくおまへだよあの道
親父八やしきの方が好物だつけお前八女の方でゆるされへから
用心しねへトいへぬうち蓮花寺の藩手割をつけ高人の愛

「豊前國と引し○かくて與次郎八喜びてゝ出るのだよのしとしく
歸りけり

第六章

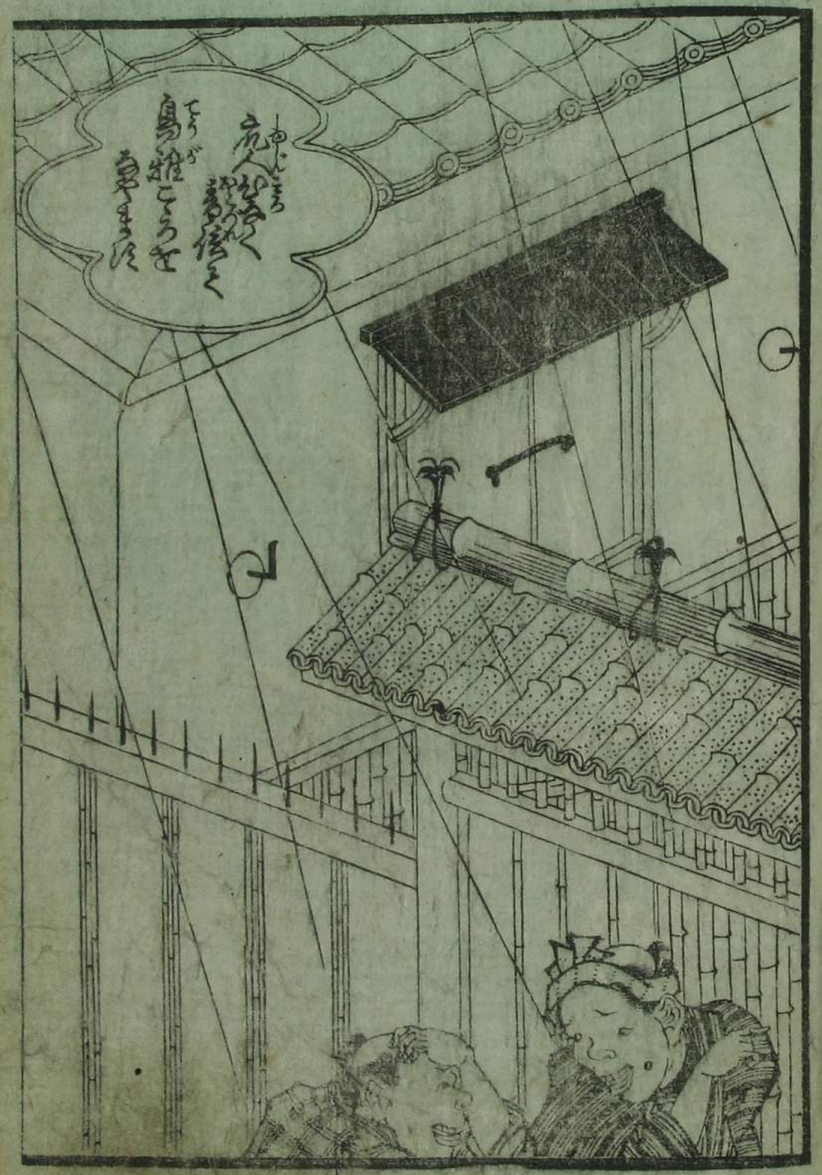
「私しやうちうじめて見ましうかな人のよくおかたでございますよ
あなたでも両親へとうどとどうかね姿　香「モウ與次郎さんの惚れこのつ
香し亭主の中ぢやア一ばん悋気のねへ男サ　「ざやいなして
私もんぞう惚れましてもでございますと婦川さん様が好
風な女だよ居るとやとてはございませんか　香「左様それでけれ

トいふ宝円より島雅とお民がかく姿を眺く着人ありとも知らず
びつくりともせずしやんと飛退二人の中へ関はず入る島田輝他日
つくろふ兵の者はよくある方の否るとあるべしまく言外りて紛番
の教ゆ ○ おもしろき亭主からいふわらけんの料理人ツ○ 八百屋「ヘイ今日八
よろしふございますから柚白魚子でござりますその外八蓮よ大
根搗菜胡瓜よ大艶ふ味木 亭「あんの宴て二八百屋ござりませう「承
まめ八百屋へふてまさ半紙束売かあるまじまをきほ 亭「ハアそれで
まろくも川柳名よとうくまろくおるを見る 八百屋「千両彩遊さん

何ぞお買になさるんでござりますか 亭「コレ此彩遊さん返すを着せろ
トお民の頬の面とちよのと寛く笑ふ 松の葉ちやうござりませ
せんト紛らして返し頬を見て彩りし縁側の端に在ゐけ「八
百屋さん気がついたものゝへ 亭「あんまりお約束中ましく話けれへ今日
「さうなる大花のうく亭主にござりますか 亭「左様さ それだから中で
ゆくのを離して二百文ずけられ 八百「ハイ それはありがたうぞんじます
モトいふところへ 亭「ヲヤまた雨が降つてきました
まアくへ 亭「左様ならまた来なせへ「ちよくちよくおいでなさいまし 妓情の

方ゞよのぞハござりませんか　香「不便ハ日和がいくら今日ハ雷でも
も勝手がいゝとおもつてみる　主「自分でもさういたしませう　香「他人の夢
のやうな世の中さかヨトいひつゝ無く猪口に目をやれバ一本よりさし込
百姓四五人　百「イヤちよつとどうぞ貝杓がお宅ごさいますトおれてさん
きつと世ハ麺の貝せぶく　香「ヨヤくどうもお待ので傘の御用か
ねマア ちつとお休みなせへトレ傘をば出しませうトおくへ持かゝれバ
「イヤ傘ハ宿がちかうございますんが今日ハ出し血お無沙汰申し
なれとよかつく来しまして出生て島雅ハいよく進く

香「左様でござりますそのまゝハお角く合のお出どうぞ今日ハ
あつまく宿がござりますならば何の御用か明日でハちよつとどうぞ
ませうか　▲「ヘイく十二左様なくてもまくで上るまませうト出まうとまれバ
香「モシ傘をお待なされ　▲「ヘイ左様ならバどうぞ是るののせうし
なくてハやなさいましとおまへ様の中へ入れくやりませぬトいつく
おそしくもらのゝ内で居る鳥雅ハ自身に傘を二三本
香「ちよつと番傘ぐらゐトハござりません　▲「イエくどうかして
まつたくもうハモウ沢山でござんすぞ左様ならちつとの中トいひつゝ



参詣おしひらきて路のわからぬ程中より来てそろそろすゝめる
都てまちまち人音して木戸口より入来る変仁先生近所の
人の都合よき異変の学社人　変「ヘイ今日は雨天でお淋しく
くらゐとぞんじてお出よ参じまして下さいまし　島雛は添しく
そのまゝよろこびが途方なしよ　香「イヤこれはマア一ぷくおあがんなさいの
まし　せつかくおいでござりまして今日は此様な事のよい日今から
端見さまのお弟子の方に歌の会がござりまして下谷辺まで
出かけましたから　変「イヤそれは幸ひなることでござりますなり由て
お座敷にあがつておゐでをチット召上りて少しからゆるりと寛と
八中の事から　香「まだ早うございますがお茶をあがりまして東漸の見物
のことでござりますから一寸でござりませうか　今日出立を
お願ひ申しまして先刻お使ひがまゐつておりました　香「もし左様なら
是がお廻りに往きまして人と変仁は向く　香「お茶あがり
通りでござりますから今日はどうぞ　変「ハア左様でござりますかな
此間よりお待ち申してゐる島雛はホツト端息して「アノ
おやかしの目が種々な職人の挿子がおかしがるおやかしのまゝ

香「ヨイコウ肉寂さんといふ名ハおかしう御座へエ　宝「左様でも御侍さんでも
ねへ字を中せられませんものヲ　香「左様なら宜くださいましておま
ねへかおかしうの様な口にて男の肉食さんといふ名をおやつけなさい
ましたのも自然でお客人の気もちがわるうござりましたか左様いふめへトと
申せ　宝「アレ左様でハござりませんお客にあるこの気もちがわるうござ
らうと申すのでござりましたト言て擦衛の方へ出しがてら挨拶がてら
出て　宝「お湯が湧ましたらお這入なされませんか　香「ヲヤく
何時の間に焚たのだ　宝「大方八吐目久助が汲込で焚ましたよ
宝「少し先刻お火鉢の火があんまり沢山出ておりましたから湯殿へ入て
自然に湧ましたヨ　香「左様ならそれで気がつきました
それバ一風呂這入　宝「其中お菜も出来ませう　香「亭主ハ焼ものを
お付なされ這入方がいいヨ　宝「ハイ左様ならトほどなく浴衣を出し
内の人持て参り其上より島雅ハ居風呂へ這入て後お宝と湯殿
にて食ても付て其中のよきことと
兼ねて八ちがひてし宿居
よろしく客でもよいこの人

る「お民や此浴衣をバ手前へのふするから湯からあがれで
化粧をするがいゝぜ おめへハ絞りの浴衣をきるがいゝト湯どの人
まで来て半畳を出く
志ねへで直に着がいゝぜ「ハイありがたうぞんじます「まア三味線
「ハイ着ますヨ「脊中が白くして美しい

「おまへもぞくぶんでうまくおちやヨおまへもいつしよにくるが
きのうもトおもうしかる雪の肌へを湯の気にて桜色に
そめなしたる美女の仙人ならねども鳥雅ハ気をもうしなふばかり
やがて二階の方へ行くとはいはで風呂より上るとさめて
まだ化粧し浴衣のまゝにて二階の方へ出んとするを見送る者
雅ハもとよりお民が風情をいはゞ柳もさくらにたへぬ美艶の
素顔なるを湯よりあがりて汲水よりおしなせし白粉も鈍仙
女房の別製ならで白粉にて世にもまれなる蘭やの玉わり白粉も一篠

濃ゆきまでも別て顔より八重歯まで流行る紅も推量に付る
舞子の八まきに撥鬢に目もなき立白粉浴衣もそちらくと意気あれ
濃の梶の姿まで机えの雪と白き浴衣のうちちらつく緋縮
細の湯まで激しく競らくしき姿が似合し娘風あまた人を
うるはしきなどあり
千年家中の仕組ますます弥栄にあらく白粉をつけ
それより家の母からあらし又化粧は年も男をつくる所のを
只ゆく親まよとよゆくこの業ふして女中なし

その身一方の粧をもつてその姿に一ツ厚化粧をもつてうく
よく見ゆるぞかし仕年の机うかしきを自慢して素顔
見えずて居るハうちくだ本意のとなりし素人化粧を濃く
あらく其の人のうちもそれより素意するとあられあらく人
その身を好みて誠の娘にゆくべしと知るべし
香「アイアイ」　言「ヲヤどうかいまたおかれかねコウト浴衣のうちで
その家の　香「ていそくしき手に袖がちくあれく来ていしく
何ゆうごつくし淡気かしてあられへその補あまりしるアイやく

「ここのへ恋慕する人「くもゐに御見えてなほひのいで
あらたびもこゑ
「やさしきよりやよひのそらにえでてみればこそ「お空
「やさしきて「やさしきて「やさしきて「どうしたらよ
「よいとくくくよいとさのさ「よいさのさ出し
トンくくくトントン調子を幸ひに作者も濡場の巻をまうたく
貞女の写書と愁歎場を二編にゆづりし三冊ひとまづ結び

風月花情 春告鳥 巻之三了

新